

## ■テーマ展

## 南部鉄器～盛岡と水沢 美と技の伝承～

会期 5月25日(火)～7月4日(日) 会場 特別展示室

南部鉄器のふるさと盛岡と水沢。今日では岩手県内で生産される鉄鑄物を総称して南部鉄器と呼んでいますが、旧南部領の盛岡と、旧伊達領の水沢では、鑄物の歴史も異なります。また、鑄物師たちはその昔、鍋や釜、鉄瓶のみならず、梵鐘や仏像、燈籠から大砲にいたるまで、様々な仕事に腕をふるっていました。

今回の展示では、2つの産地の歴史と鑄物師の仕事を紹介します。

## I 水沢鑄物～伝承900年の歴史～

## 〈奥州藤原氏の時代〉

水沢の鑄物業は、今から約900年前の平安後期、豊田館とよだのたち(現在の江刺市岩谷堂餅田)に居た藤原清衡が近江国(滋賀県)から鑄物師を招き、餅田村寺田の松ノ木部落で始めたものが、次第に南下し、水沢市羽田町に伝わったものと語り継がれています。

中世の鑄物師は「歩き筋」といわれ、需要に応じて移動し、必要量を生産すると他の需要地へ去るのが常でした。清衡が平泉へ移ると、鑄物師集団も一緒に平泉へ移った、一部は松ノ木に残って鑄造を続けた、といわれますが、明拠はありません。

しかし、奥州藤原氏の時代の遺跡からは鑄型が出土しており、平泉に鑄物師が存在したことは確かです。藤原氏の滅亡後は、鍋や釜などの日用品を鑄造し、細々と技術を継承したと伝えられています。

## 〈鑄物師の来住〉

水沢地域に鑄物師が定住するようになるのは室町初期のことで、羽田町の岩脇千葉家はその初めと言われます。千葉家伝来の系図によると、永和年間(1375-77)、京都聖護院付の長田正頼という鑄物師が奥州に下り、千葉家の養子となりました。正頼は後に同地を支配していた葛西氏に召し出され、鍋釜鑄造の免許を得、以後家業としたといいま

す。千葉家には室町前期創業の伝承を裏付ける資料が伝わり、敷地内からは14世紀後半とされる鑄物の生産跡が発見されています。



水沢市指定史跡「水沢鑄物発祥の地」  
水沢市羽田町

現業地、羽田町の田茂山に鑄物業が定着するのは、およそ300年前、江戸初期のことです。千葉家等に学び、天和3年(1683)に鑄物業を興した及川喜右衛門光弘という人が、中興の祖と讃えられています。

田茂山鑄物は、藩政期には仙台藩の統制と保護を受け、鉄鍋や鉄釜を中心に、梵鐘等の仏具、銅器、鉄器類を生産し、幕末には大砲製造にもあたっています。

## II 南部鉄器の源流～城下町盛岡～

## 〈盛岡築城と鑄物師の仕事〉

南部鉄器の“南部”は、盛岡藩主南部氏に由来します。盛岡の鑄物は、築城の頃、慶長年間(1596-1615)に始まったといわれ、歴代藩主の庇護のもとに育まれてきました。

盛岡で最も有名な鑄造品、上ノ橋の擬宝珠は最初、初代藩主利直の治世、慶長14年(1609)に作られました。擬宝珠には鑄物師の名が記されず、確証はありませんが、南部氏が甲州(山梨県)を本拠とした時代から仕えて来た有坂氏の手によるものと伝えられます。

盛岡の鑄物の歴史は、後に藩お抱え鑄物師となるこの有坂家と鈴木家、藤田家、釜師小泉家の歴史と重なります。在銘、現存の資料が少ないため、その仕事の全容を明らかにすることは困難ですが、日用品から贈答品、梵

鐘、大砲等の大型製品まで、藩の鑄物の御用はこの四家を中心となって担っていました。

現在では鉄器と銅器の生産を同時に手がけることは稀ですが、昔は、鉄鑄物を生産する鑄物師のうち有力な者が、梵鐘など大型の青銅製品も鑄造していました。鏡や飾り金具など青銅製の小型品を専門とする職人もいましたが、銅より融解温度の高い鉄鑄物を生産する鑄物師が青銅製品を鑄造することはあっても、その逆は許されなかったといわれます。



上ノ橋「擬宝珠」盛岡市上ノ橋町  
慶長14年(1609) 重要美術品

## 〈御鑄物師と御釜師〉

**鈴木家** 甲州から下り、寛永18年(1641)に藩に召し抱えられたという鈴木縫殿家綱を祖とします。梵鐘や燈籠などの大作が知られ、幕末には大砲鑄造の命も受けています。正保3年(1646)の盛岡城の時鐘と、それに代わる慶安5年(1652)の時鐘の制作は、ともに鈴木忠兵衛が拝命しており、当時藩内随一の鑄物師だったようです。前者は後に花巻城に、後者は明治になって東京・谷中の全生庵に移されますが、ともに現存し、今も時を告げています。

鈴木家には忠兵衛系(鈴木主善堂)と喜兵衛系(鈴木盛久工房)があり、江戸後期からは鉄瓶なども多く製作したようです。



鈴木忠兵衛、辰之助「鉄燈籠」愛宕神社  
文化2年(1805) 大迫町指定文化財

**小泉家** 藩内で茶の湯釜を製作させるため、藩主重直が万治2年(1659)に召し抱えたという京都出身の小泉五郎七清行を祖とします。

釜屋五郎八こと小泉仁左衛門清則は、延宝6年(1678)に江戸で召し抱えられ、盛岡に下りました。やはり茶の湯釜の製作が本業と思われませんが、現在も残る延宝7年(1679)の時鐘や報恩寺の梵鐘(1698)、大迫町到岸寺の薬師如来坐像(1704)、かつて盛岡城本丸天守櫓にあった鯨(1679、80)など、多くの青銅製品に名を残しています。清則が高度な鑄造技術を持つ職人として重用され、藩内の主要な仕事を任されていた様子が伺われます。



小泉仁左衛門清則「時鐘」盛岡市内丸  
延宝7年(1679) 盛岡市指定文化財

また、三代仁左衛門は南部鉄瓶の創始者と伝えられ、四代仁左衛門は藩命により大砲鑄造を江戸で学び、茶の湯釜においても優れた技量を示しています。

藩の茶道振興と釜師の任用が、南部鉄器発展の礎を築いたといえるでしょう。

**有坂家** 初代は京都の人、七代のとき甲州に下り、明徳年間(1390-94)に南部氏に仕えて陸奥へも随行したと伝えられます。

十三代のとき盛岡に移住。十四代茂衛門吉忠は、慶安5年の時鐘鑄造に棟梁の一人として加わっています。十五代茂平次から藩に召し出され、十八代富右衛門は盛岡藩主の菩提寺である聖寿寺五重等の九輪を作り、その技量が認められて鑄物師棟梁となっています。

**藤田家** 鈴木家と同じく甲州の出で、二代の時から盛岡に居住しています。鍋善と呼ばれ、鍋類の鑄造を主とした町の鑄物職人でしたが、品質が良いことで定評があり、後に藩のお抱え鑄物師となります。

三代善助の寛保(1741-43)頃から梵鐘等を鑄造し、五代善兵衛が文化9年(1812)に奉納した盛岡八幡宮の「青銅燈籠」は技巧の優秀さで知られます。また、天保14年(1843)には兼ねて御鉄砲師を拝命しています。幕末頃からは、絢爛豪華な磨きの鉄瓶を製作し、「鍋善もの」として評判を得ました。

### Ⅲ 明治・大正期の南部鉄器

藩政期に発展してきた盛岡、水沢の鑄物業も、各藩の庇護を失った明治維新後の変革期には、衰退を余儀なくされます。

しかし、生産と流通の体制が整い、国内外の展示会での入賞により名声が高まると、各地からの注文が急増。盛岡では鉄瓶と茶の湯釜が主でしたが、水沢では明治23年の東北本線開通を利用して北海道まで販路を広げ、鍋、釜、風呂鉄砲等の日用品の生産地として

東北一を誇ります。

明治末には再び沈滞気味となりますが、同41年(1908)秋の皇太子東北行啓の際、八代小泉仁左衛門が鉄瓶の製造工程をご覧に入れて全国的に話題となったのを契機に、県や市も協力して、南部鉄器改良への取り組みが始まります。

旧盛岡藩主南部利淳は大正3年(1914)に「南部鑄金研究所」を開所し、東京美術学校で鑄金を学んだ松橋宗明を招聘。松橋は各所で技術や意匠の指導にあたり、人材育成においても大きな功績を残し、南部鉄器の新生面を開きました。研究所から後の東京芸術大学教授内藤春治が出たことも特筆されます。



松橋宗明「文鎮 かわらべ」照井芳男氏蔵  
盛岡市指定文化財

その後も大正の好況、昭和初期の不況など、盛衰や曲折はありますが、南部鉄器の美と技は、職人たちの手により絶えることなく今日まで受け継がれてきました。今回の展示では、産地の発祥から大正期までを中心に、その伝承の一端をご紹介します。

(齋藤里香 専門学芸員)

南部鉄器講座 各回13:30-15:00 聴講無料

第1回 5月30日(日)

「南部鉄器の歩み」

梅原廉氏(花巻市博物館長)

第2回 6月6日(日)

「暮らしの中の南部鉄器」

小泉仁左衛門氏

第3回 6月13日(日)

「南部鉄器の明日—伝統の技と科学の目—」

勝負澤善行氏(駒いわて産業振興センター)

展示解説会 各回14:00-14:30

①5月29日(土)、②6月27日(日)